

グスタフ・クリムト作『死と生』の鑑賞（中学3年生）における、美的特性の感受と主題感受の調査研究

立原慶一

本稿は造形的特徴を尋ねるワークシートの質問事項にある、「形・構成」、「構図」、「色づかい」に対する中学3年生の回答に着目する。グスタフ・クリムト作品の異彩を放つ独自の絵画様式が、授業の場面では鑑賞体験的にあまり豊かでない、彼らの造形的な興味・関心を駆り立てることになる。その高さに由来するものと思われるが、この3項目は生徒から実に多彩な意見や感想が寄せられる。その中身も造形表現のあり方と効果をめぐって、中学生らしい立場から多様に語られることになる。さらに調査資料は152名という数量的条件を備えているので、客観的な成果を目指した学的考察の対象となりえよう。

「中学校学習指導要領美術編」によれば、鑑賞能力とは美的特性及び主題を感受する能力を指しているのであるが、授業の目的もその能力を育成させることに置く。「ワークシート」における質問項目はその観点から設定された。かくて回答内容からは、鑑賞能力一般の様相を窺い知ることができる。その質問項目によって、生徒における鑑賞能力の特質を見極められる、と考えてよい。

「形・構成」、「構図」、「色づかい」の造形的特徴から感受される美的特性や美的秩序の回数、美的特性が抒情的に正か負か、さらには主題の直観的把握のあり様を分析することで、生徒における鑑賞能力が正当に序列化されよう。本稿では、とくに美的特性に関する感受の状況を感性能力判定のための尺度に据え、主題感受を含めた鑑賞能力一般を分析し、本題材で発揮されるその様相と特徴を探ってみようと思う。

本調査研究によって中学3年生の死生観がここに垣間見られた。一人称的主題の感受者と二人称的主題の感受者を合わせて約7割に達したことは、「死と生」が情報化された抽象的なイメージではなく、多くの生徒が何らかの共感を伴った、身近なものとして捉えていることが分かった。ただしそこでは、何かが生まれる一方で何かは死にゆくという、生と死がバランスよく捉えられているのではない。全体的な傾向として、彼らにとって生は決して喜びではなく、死の苦しみが投影された形で、生の悲しみや苦悩を捉えるところに力点が置かれていた。

身近にあるものとして不幸や悪行、格差、犠牲者などを生み出す社会悪が、直観的に把握されていたことも特徴となっている。そうした中、一部の生徒に「死の自覚を前提として、積極的な生き方をしたい」や「死を直視して、欲ばって生きて幸せになって欲しい」との一人称的な主題感受が達成されたことは、死によって限界づけられる生のあり方、生き甲斐が発見された事態でもある。それを知って、指導者側として彼らの存在を心強く思うものである。

本考察を通して、美的特性の感受スタイルがその後の主題感受のあり方に、大きく影響を与えていることが分かった。すなわち単純な美的特性が構造化されて、美的秩序に関する美意識が新たに形づくられたり、抒情が正負にまたがるなど両義的な美的特性の感受が

なされたり、対比の美意識の交錯がその度合いを増すならば、彼らが本題材で味わうべき美的情趣に複雑さが醸しだされる。それによって感受体験の深さを特徴とする、一人称的主題がより多く直観的に把握されうるのである。そうした傾向のあることが判明した。美的特性の感受場面は、鑑賞活動過程全体の中では時間経過的に中間点にあるが、それが鑑賞体験を充実させる鍵となるのである。

本稿では、鑑賞の授業で生徒による美的特性の感受をどのように位置づけ組み立てるならば、主題感受に有効かが明らかになった。今後は、その方向で題材実践を試み、鑑賞教育を充実させたいと思う。